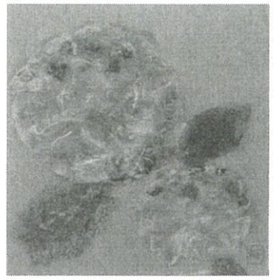
事務所を訪ねて

ささえるさんの家となみ

住所：富山県砺波市新富町２－４１
Mail：yukowashi@gmail.com



『和紙で作るあじさい画』（鷲北作）

精神保健福祉士／臨床美術士：鷲北裕子

ソーシャルワーカーが担う臨床美術士の可能性

※**臨床美術（クリニカルアート）**とは、絵やオブジェなどの作品をつくることによって脳を活性化させ認知症の症状を改善するために開発されました。作品をつくる際には、独自のアートプログラムに沿って、単に「見る」だけでなく、触ったり、匂いを嗅いだり、味わったり、音楽を聴いたりしながら手を動かすことで、全身の感覚を刺激します。作品作りに、上手い下手は関係ありません。「臨床美術士」とのコミュニケーションの中で「褒められる」「共感を得る」ことの喜びを感じながら、自由に前向きに取り組むことが大切です。≪五感への刺激≫と≪リラックスできるコミュニケーション≫によって、「脳」が活性化。感性の目覚めや回復、心が解放されることはもちろん、生きる意欲や潜在能力を引き出すことにも効果があると言われています。

（TOPPAN 芸造研パンフレットより引用）
https://www.zoukei.co.jp/

友達がプレゼントしてくれた手彫りの看板の前の母娘

「ささえるさんの家となみ」は、住宅街のすっと入った路地裏にあり、地域の憩いの居場所として存在しています。

そこは、鋸（のこぎり）屋さんをしていた店舗兼実家をリノベーションした古民家です。

道路側の戸は全面ガラス張りで、灯りがついていれば、気軽に「何やっとるがけ？」と戸を開けて、入っていけそうな場です。「住み慣れた町で心豊かに暮らす」をモットーに掲げているその居場所は、本当に温かい空気が漂っています。

そこの主、鷲北裕子さんは、地元の単科の精神科病院に 35 年間勤務しています。その日々の中で、自分の経験だけで患者さんに対応していてもよいのかと一念発起して、日本福祉大学通信部に入学しました。私の人生でこれほど頑張ったことはない！これを乗り超えたのだから、もう怖いものはない！と、今の自分を支えてくれる体験だったとのことです。医療モデルから福祉モデルにシフトチェンジした経験だったと。病気とつくからには、治療はもちろん大事ですが、地域に出るとその人なりの生活が重要。生活をささえる、地域をささえる、そんな思いで、いつか居場所をつくりたいと心に秘め、2015 年には精神保健福祉士の資格を取得、その後、臨床美術士の資格も取得されました。

「ささえるさんの家となみ」での臨床美術の様子

臨床美術のセッションは、月に数回は、「ささえるさんの家となみ」にて実施、依頼に応じて、施設の入所者様や病院の患者会などで実施するなど、病院勤務の傍ら、ご自身のお休みなどに精力的に活動されています。

その他、毎月１回は、音楽療法士、薬剤師、保健師、歯科衛生士、看護師などの専門職で構成された「ささえる街の保健室」を開催しています。臨床美術体験とともに、地域の方に、健康に関するお話や、音楽療法などを楽しんでいただく企画もしています。

鷲北さんが臨床美術に出会ったのは、2015 年に自らの病気を体験した頃に、知り合いの臨床美術士さんに、体験会に誘われたことがきっかけだそうです。お母様と参加されて、臨床美術アートプログラム『和紙を使ったあじさい画』を楽しまれました。実際やってみると、いろいろなことを忘れ、しがらみも忘れ、心が解放されたとのことでした。子どもの頃、先生に言われるままに写生し、ほめられる絵を描くということが辛くてたまらなく、それが、臨床美術に出会い、こんなに自由に制作するプログラムがあるのだと感動されたとのことです。

「ささえるさんの家となみ」を立ち上げたきっかけは、社会福祉協議会から各町内でサロンを立ち上げたら補助金がもらえると聞いた民生委員の方から、「鷲北さん、何か楽しいことしてくれんかね」と相談されたことからです。実家の５軒隣が公民館で、そこで当初、恩師に臨床美術をやっていただいていたのですが、公民館が耐震構造の工事で、しばらく閉鎖となり、それなら実家をリノベーションしようと思い立ち、そこに臨床美術の拠点を移動されました。クラウドファンディングでも応援をいただき、2019 年 12 月 15 日に「ささえるさんの家となみ」がオープンしました。

サ高住でのセッションの様子

鷲北さんは、精神科病院に勤務する中で、患者さんは、「自己肯定感」が低い方が多く、彼らは今まで自分が認められるようなことがあまりなくてこれまで来たのだなと思うことがあるそうです。臨床美術を通し

て、ワクワクする瞬間を提供したい、少しでも楽しい時間をと思うようになったとのこと。いろいろな機能が低下してきた方々を少しでも有意義なものに変えられる時間を月 1 回でも 2 回でもあればと。認知症で、その日何をしたのかを忘れても、作品は残る、そこにその人の想いや何かが残ればいいのではと思うようになったと。

臨床美術アートプログラムで『花火のガラス絵（塩ビ板仕様）』を楽しまれた時のこと、お母様が弟の話をしだしたそうです。ご自身にとっては叔父にあたる、母の弟が亡くなるときに、「もっと花火をしたかった」と初めて話されたとのことです。

また、親友の認知症のお母さんが、臨床美術アートプログラム『雪化粧する樹木』を体験してもらったところ、「桜の木の下でスキーをしたのよ」と、昔の思い出をとうとうと語られ、友人はこんな母をしばらくは見ていないと驚かれたとのことで、記憶を呼び起こす臨床美術の可能性に驚かれたそうです。

精神疾患の方の中には、内に感情をためている方も多く、言葉にできないそういう想いがこもっているし、ある日その想いが爆発する時もある、病気の正しい知識を理解し、それをアートケアにつなげられる。福祉職はそんな強みを持っていると考えます。その可能性は医療にも福祉にもつながっていない方々にとって、少しでもお役にたつのではないかと考えます。今後の展望は、人の中に出たくない方には、マンツーマンで、ソーシャルワーカー（精神保健福祉士）のマインドを持った臨床美術士として、関わることができるのではないかと語られていました。

＜取材を終えて＞

今回、鷲北さんのお話を伺い、ソーシャルワーカーが担う臨床美術士の可能性は無限に広がっていると感じることができました。

制度や医療だけではなんともならないご本人たち当事者の心のもどかしさを、臨床美術に取り組む間が楽しいひとときとなり、少しでも心が解放されたら、素晴らしいのではないかと考えさせられました。

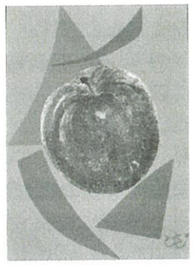
私も、長野県飯田市で、令和 6 年 3 月から社会福祉士事務所に併設して臨床美術のアートスタジオを南信で初めての臨床美術の拠点として立ち上げ、臨床美術士として活動を開始しました。私も、鷲北さんのように、住み慣れた地域で心豊かに暮らす日々を提供できるソーシャルワーカーマインドを持った臨床美術士として活動していきたいと思いました。

北陸銀行砺波支店での展示会

臨床美術とは：彫刻家 金子健二が中心となって開発したプログラムです。

1996 年に医師、美術家、ファミリーケア・アドバイザーがチームとなって実践研究をスタートさせました。医療・美術・福祉の壁を越えたアプローチが特徴の臨床美術は、介護予防事業など認知症の予防、発達が気になる子どもへのケア、小学校の特別授業、社会人向けのメンタルヘルスケアなど多方面で取り入れられ、いきいきと人生を送りたいと願うすべての人へ希望をもたらしています。

「日本臨床美術協会ホームページ」https://arttherapy.gr.jp/より引用。



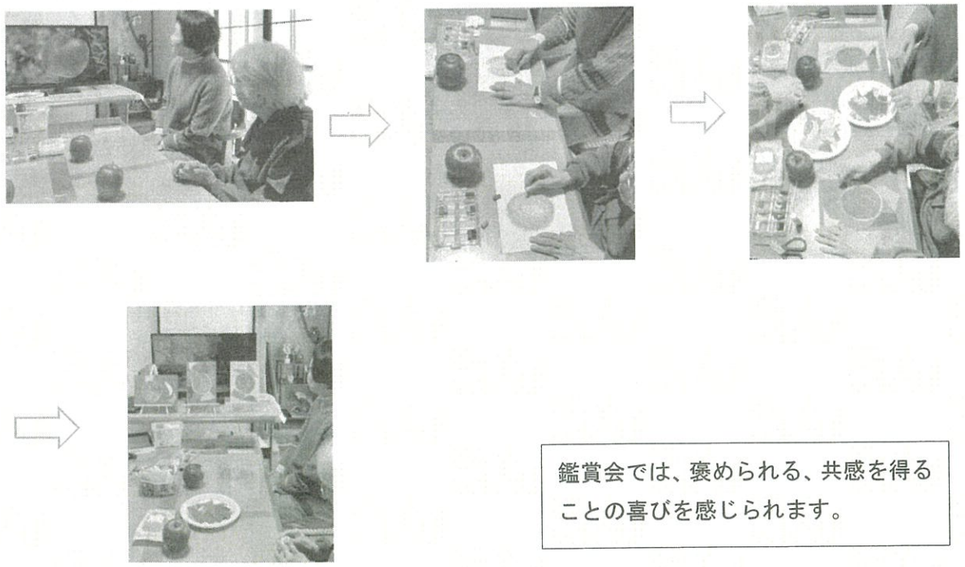
臨床美術の実際：臨床美術アートプログラム『りんごの量感画』
アートスタジオあかね雲にて

導入において、「りんごの唄」をみんなで歌います。

目の前のりんごを眺めたり、香りをかいでみたり、触ってみたり、食べてみたり、持ってみたり、コンコンと叩いてみて響きを聞いたりと、五感（視覚、臭覚、触覚、味覚、聴覚）を研ぎ澄ます。そのために、導入では、臨床美術士による独自の創意工夫がなされます。そこから、りんごを中身からだんだんと成長するように描いていって、皮をかぶせてといった順に、描き上げていく。仕立てで、紙に描いたりんごを切り抜き、画面上に端材とともに構成して完成といったプロセスをたどります。

臨床美術をやる上でのルールがあります。①ちがうと言わない。②うまいと言わない。③手伝わない。④急がせない。⑤止めない。の 5 点です。臨床美術の目的は、作品を完成させることや写実的にきれいに描くことではありません。創作活動そのものを楽しんでいただきながら、脳を活性化させることを大切にしています。

TOPPAN 芸造研「いろは帳」より引用。



鑑賞会では、褒められる、共感を得ることの喜びを感じられます。